

ピョンヤンは宣言する

第2章

1

ソントン郡に入る山里の道にそって、一台の乗用車が土ぼこりをまきおこしながら走っていた。

車の中には道党責任書記のパクユンシクが座っていた。車窓の外を街路樹が通り過ぎていき、前方の道路が水の流れのように急速に迫ってきては車体の下に消えていったが、車の動きは遅く感じられた。

パクユンシクは平壤から帰るやいなや、書記と部署の責任者たちにキムジョンイル総書記の話を伝達し、予定していた執行委員会は延期して、すぐにソントンに向かった。

彼は道党責任書記として長いあいだ仕事をしながら、この道を幾度となく通ってきた。夏も冬も、ぼたん雪が降りしきる昼も、激しい雨の夜も……。道、道は彼にとって人々の生活が流れるだけでなく、党の指導力がたゆみなく続く血脈の一つでもあった。道端にまばらに立っている樹齢をかさねた街路樹と苔むした石垣、土ぼこりをかぶった平たい岩、色あせた道路標識、山の斜面の段々畑と生い茂った桑畑……。以前は無心に見ていたすべてのものが、きょうは新しい意味をもって感じられた。陽の光が火花を散らす車のガラス窓に、ふとチャヨンジンの顔が浮かんだ。

隣の郡党で働いていたチャヨンジンは、ソンギュテが政権機関を強化するための党の措置にしたがって、道行政経済委員会副委員長に昇格したあと、その後任としてソントン郡党責任書記になった。

2人は1週間かけて郡党活動についての引き継ぎをした。郡の任務を引き継いで道にやってきたソンギュテは、明るい顔で部署を回り赴任のあいさつをした。しかし、数日後に道党にやってきたチャヨンジンはそうではなく、顔が暗かった。重責を担い、心が重いからだけではないようだった。

彼と話をした。そのとき、パクユンシクは人について引き継いだ内容を了解し、人にたいする評価においては前任者の見解を絶対化せず、仕事をさせてみて自分の信念にそって評価するようと言い聞かせた。チャヨンジンは沈鬱な顔で言った。

「郡の人口成長率が低いです。この20余年間、出生率は幾何級数的にのび、死亡率はしだいに低下しているにもかかわらず、人口が増えませんでした。原因を調べてみると、暮らしやすい平野地帯や都市に流出し続けています」

パクユンシクはこの数年間、郡を平野地帯におとらず向上させようとずいぶん苦勞してきた。遠い昔には人が住めなかった僻村であるソントンの人口が増えたのは、世を捨て数奇な運命をたどった人々の事情と関連していた。世捨て人となった彼らは、炭焼きか獵師

をし、あるいは火田を拓いて細々と生きながらえてきたが、その時期には、だれもがソントンの次はあの世だと言った。

解放後には人々の暮らしがとても楽になり、みちがえるように変わったが、今日でもソントン郡は国の経済発展にまったく寄与できず、食糧だけかろうじて自給自足するやせた土地である。ソントンという地名は、道の経済生活で負担の代名詞だった。彼はいつもソントンをあわれに思いながらも、国の食糧問題解決において重要な役割をはたす穀倉地帯の郡や経済的意義が大きい工業が集中する市、郡に、より大きな関心を向けるようになっていた。

乗用車はなだらかな尾根にさしかかった。遠くに郡所在地がのぞめた。三面が山に囲まれた山間の村のあちこちに、そそりたつ建造物が見え、路面や山麓、小川のほとりのあちこちに人々がごった返していた。パクユンシクは、郡を整えようと立ちあがった人民の熱い心が思われて、そこから視線をそらすことができなかつた。車が曲がりくねる山道を軽快に走りおり、平坦な道にさしかかると、運転手が車の速度を落として静かに言った。

「あれは郡党責任書記ではありませんか」

右の方の野原のなかの牛車道を、作業服姿の人が夢中になって自転車を走らせていた。いかにも力一杯ペダルを踏むので、自転車が左右にふらついて、頭からぬげおちた麦わら帽子は肩先で風にあおられて踊っていた。

道党責任書記は道路の交差点につくと車から降り、牛車道にそって歩いていった。自転車があおられるような暖かい風に、服の裾がはためいた。

チャヨンジンは15歩ほど前で自転車からとびおりて走ってきた。還暦に近い道党責任書記は目尻に微笑みを浮かべて、年齢からすると自分の弟のような彼に手をさし出した。

「ご苦労さん！」

「責任書記同志」

二人はどちらからともなく手を取りあった。郡党責任書記の顔や首、手は、日光と風にさらされて黒ずんでおり、体からは土と草のにおいがぷんと鼻をついた。

「どこから来たんだね？」

「キアム里から……」

「そうか、そこに出かけて実地体験をしたんだね？……そこにちょっと座ろう」

「村に行かないのですか？」

「そうする時間がないんだよ、きょうは……。すぐに帰って執行委員会をしなくてはならない」

彼らは道端の草原に並んで座った。道党責任書記は目を細めて、風にざわめくトウモロコシ畑を見まわした。彼自身、このような畑を守るために血を流してたたかった戦争老兵であり、代々、血の涙と汗でこの地を肥やした農夫の子孫なので、畑の入り口に座れば、心の中にいいようなない感懐がわきあがるのだった。

彼は、胸がしめつけられそうになって静かに深呼吸した。

「トウモロコシの作柄がいいようだが……」

「はい……」

パクユンシクは、なにごとにおいても敏感なヨンジンがすでに何かを感じて興奮していたので、彼の心を和らげようと、ゆったりした口調で話した。

「実地体験はいつまでだったのかね？」

「きょうが最後の日です」

「里におりていって細胞書記と会ってみて、どうだったかね？」

「郡党に座っていてはわからない問題がたくさんわかるようになりました。人民の苦しみ、心情も深く理解できるようになり…… 農場員の細胞書記の目から郡党委員会の活動をふりかえってみると、いたらない面がたくさんあります。官僚主義、主観主義の要素がはっきりと見えます。まず、わたしの活動から……」

「上部からみるだけではわからないだろう。下部から見なくてはいけない」

「きのうキアムで、協同化の時期から長いあいだ管理委員長を勤めた老人が亡くなりました。5日前に息子におぶわれてわたしを訪ねてきて党費を払い、一つの問題を提起しました。キアムの人々の父親たちは、あのキアム山を越えた共同墓地にみな埋葬されていますが、そこに行く道が険しく急きゅう 勾配なため、お盆のたびに子どもが足首をくじいたり、女性たちが転んでけがをしたり…… 事故が起こらないときがほとんどなく、その道を平らにならしてほしいと言いました」

「なんと、どうしてそんな不便なところに墓地があるんだね……」

「以前、ここで郡党委員長をした分派分子が、山が多いわが国では農業ではなく、牧畜を基本にしなければならぬ、野山をみな放牧地に利用するためには、そこに墓をたてることは厳禁だといって、前からの墓もキアム山のうしろに移すように命令しました」

「ふうん。そんな昼間のお化けがいたのか……」

「老人は、自分が管理委員長をしながらその者にむやみに従ったために、そのようになってしまったと言い、自分は死んだ後もその道のために人々から悪口をいわれるだろう、人々の願いだから道を新しくまっすぐにならしてくれと言いました。老人は最後の党費とその請願を残して亡くなりました。…… それで、里党書記に意見を提起しました」

「まったく…… むずかしい問題だな」

「昔、里党書記や管理委員長が人々のそのような不便を知ってはいたのですが、いつも仕事が忙しくて次の年…… 次の年と先送りして、30年という歳月が過ぎてしまいました」

「活動家の思想観念の問題がどれほど重要かということだな」

「わたしもキアムに来て実地体験をしなかったなら、知らずに過ぎてしまったことでしょう」

「うむ……」

二人はしばらくのあいだ、無言で物思いにふけていた。

「平壤からいつ帰られたのですか？」

「きょう…… 道党にちょっと立ち寄ったが、トンムのところに駆けつけたのだ。うれしい知らせを伝えようと思って……」

「え!？」

道党責任書記はチャヨンジンの手首をしっかりとつかんだ。

「君に…… キムジョンイル総書記は、トンムが仕事をどのようにおこなっているかとたずねられた。一度、必ず行くと約束したが、行けなくてすまないと言われた……」

チャヨンジンは涙をこぼすことも、喚声をあげることもできなかった。顔色が沈着になり、深い思いに沈み、激しい呵責にさいなまれるかのように、そっと目をふせて肩を落と

した。額に覆いかぶさった髪だけが、風にゆれた。畑のトウモロコシも息をひそめているかのようだった。しばらくして、彼は頭をあげていぶかしい目で道党責任書記を見つめた。

「それは本当ですか…… どうしてわたしのことを…… わずか数分間、会ってくださっただけなのに…… たぶん、わたしがそのとき、怪我をして足を引きずっていたから…… その印象が忘れられないのではないのでしょうか？」

「わたしも少し考えて見た。そんな印象…… どの、だれにたいする印象かということではないようだ。僻村という困難な条件のもとで働き、暮らしている数万名の人民がおり、トムムが彼らの運命に責任をもつ郡党責任書記だから、忘れられないのだよ」

ヨンジンは言葉につまって深い思いに沈んだ。パクユンシクはキムジョンイル総書記が中間地帯の二つの郡の模型図案を見て言われたことをもれなく伝達して、こうたずねた。

「トムムが建てた住宅はどうかね？ 台所や倉庫が狭くないか？ 広さはどの程度あるかな？」

「……」

ヨンジンは答えることができなかった。

「物差しで測って見たことはないのかね？」

「わたしが本当にいたりませんでした。具体的に調べて設計からやり直します。壁を取り付けているものや出来上がった家でも、狭ければ壁をつくり直して再度取り付けてでも、広くします」

道党責任書記は不満げだった。

「そのように実務的に処理する問題ではないようだ。設計をやり直す前に、活動家の思想観点を正さなくてはならない…… 委員会で経済部門の責任幹部をみな参加させて、人民のためにどのように働いてきたのか、人民の忠僕らしく生きてきたのか？ この問題を全般的に検討して、反省しなくてはならないのではないかね？」

「そうします」

「キムジョンイル総書記は、今回、再度強調された。他人が『ペレストロイカ』をしようとか何をしようとか、われわれは無益な論争に巻き込まれてはならず、社会主義建設をりっぱにおこなって、われわれ式社会主義制度の優越性を示さなくてはならないと…… わが人民がみな自分の住む所で社会主義制度の優越性を感じてこそ、われわれの制度が強固になるのだと懇切に教えられた」

「はい……」

「キムジョンイル総書記は、活動家が人民の忠僕になって、家を一棟建て、道をならずとも、人民の志向と要求にあわせてすべきだと言われ、困難で力にあまるときには、『人民のために服務する！』というスローガンを心のなかで叫んでみなさいと言われた。そうすれば、主席の生涯が思い出され、力と情熱が生まれてくると言われて……」

チャヨンジンは、その含蓄のあるスローガンに込められたキムジョンイル総書記の思いが胸にせまり、思わず小さな声でつぶやいた。

「……人民のために服務する！…… 服務する…… 生涯の座右の銘として働きます」

道党責任書記は、彼の肩に親しく手を置いた。

「これをみなさい。キムジョンイル総書記は、主席の誕生 80 周年までに平壤で 5 万世帯の住宅を建設することについて述べられ、社会主義建設をりっぱにおこなって、誕生 80 周

年を契機にわが社会主義制度の優越性をさらに輝かそうと言われた。トンムたちも、主席の誕生 80 周年までに郡を立派にととのえ、主席と党に喜びをさしあげよう」

バクユンシク責任書記は、一時間ほど話をして帰った。

道党責任書記の車が峠のむこうに消えるまで道の真ん中に立っていたヨンジンは、すべてが夢のようで空を見あげた。はるかに高く青い空間で、灼熱の太陽が燃えていた。

(わたしのことを…… わが郡のことを考えてくださったとは…… ああ！)

ふりそそぐ陽の光のなかで青々と繁る山や畑、緑の街路樹、きらめく小川の水…… 地上のすべてのものが生まれ変わったように清新な息吹をただよわせ、ざわめいているようだった。考えれば考えるほど、わきあがる激情に胸がふくらんで、彼は無邪気な子どものように光のなかを夢中で走って行き、声をかぎりに叫びたかった。しかし、郡党責任書記は深いもの思いに浸り、その場に立ちつくした。しばらくして、彼は自転車を押して村の方にゆっくりと歩いていき、小川のほとりの茂みのなかに入っていった。

茂みのなかには小道ができていた。だれかが白い砂を敷きつめた小道には、自然のさわやかな情趣がひっそりとただよい、若い柳の枝の影がちらちらした。いつしか、彼の前に芝生が絨毯のように敷きつめられた空き地…… よく育ったチョウセンマツに囲まれたこじんまりした空き地が現れた。ヨンジンは一株のチョウセンマツのそばに立って、感慨深いまなざしで空き地を見まわした。

忘れられないその日、キムジョンイル総書記が現地指導をされながら、随員とともにしばらく休息し昼食をとった場所である。おそらく村に入ったら世話をかけるからと、このような小川のほとりで旅を楽しむ弁当を囲み、昼食を済まされたのだろう。

涼しい風にそよぐ柳の枝も、陽の光にきらめく小川の流れも、その日を懐かしんでささやいているようだった。

その日、ヨンジンは痛めた脚のために思うように体を動かすことができず、家に座って地方産業工場の改築設計図案をながめていた。半月前の夜中に、村の農場の段々畑を見まわっているとき、足をふみはずして石垣の下に転落したのだが、医者は足首の骨にひびが入っているから、絶対安静にしなくては骨髄炎を起こすとおどかしたのだった。

正午をずいぶんすぎて、外で乗用車が急用を知らせる警笛が上がり、続いて郡党委員会の活動家が駆け込んで来て、息を切らして信じられないことを言った。あの小川のほとりに、キムジョンイル総書記が来ておられるということだった。人は衝撃的なことに出会うと沈着さをなくすものだが、その衝撃も並のものではなく、キムジョンイル総書記が近くに來られたという言葉に、ヨンジンは思わず喚声をあげ席をけて立ち上がった。夢なのか現実なのか……

彼は、よろめく自分にだれが杖を握らせてくれたのか、どのようにして外に飛び出し車に飛び込んだのかわからなかった。走る車の中で、両手でいそがしく髪をなでつけて身仕舞いを整えた。

小川のほとりからそれほど遠くない道の角で止まった車から飛び下りたが、どこから出て来たのか若い人が前にたちふさがり、誰かとたずねた。ヨンジンが自己紹介をすると、その幹部は笑みをうかべて、いま食事中なので少し待つようにと言った。そして道端の茂みの中に軽々と入っていった。茂みにさえぎられて見えない小川のほとりから、愉快的笑い声と話し声が聞こえてきた。

(なんと、あんなところで食事を……)

彼は、おもわず茂みの中に一步、また一步、近づいていったが、自身の失策に気づき、驚いて柳の木のそばに立ち止まった。作業手帳も持たず、素手で走ってきたのである。郡党の活動と郡の暮らしについて問われたら、数字的にも正確に報告しなくてはならないのに、どうするのか。今からまた行って来ることもしないではないか……。背筋にひや汗が流れた。突然おそった不安感と小心な心のため柳の木の後ろにひっこんだ。そして、頭を下げて郡内の党員数とその構成状態、郡の経済状況と関連して必要な数字をすばやく思い起こした。段々畑の坪数、新たに造成した桑畑の面積、土地開墾運動の実績、稲やトウモロコシの今年の収穫高、今年予想収穫高、食料工場の醤油、味噌の一日の生産量、郡内のテレビの総台数、不足数……。あらゆる数字が頭の中を音をたてて駆けめぐった。

ふと、そばに人の気配がして驚いてふりかえると、先ほどの若い人が手で小川の方を指差して、キムジョンイル総書記が呼ばれていると言った。

ヨンジンは目の前で眩しい閃光がひらめいたように感じた。杖を横にすばやく捨てたヨンジンは、若い人の存在も忘れて、前に向かってわれをわすれて歩いていった。

小川のほとりの草原、グラビアや記録映画で見たように質素な保護色のジャンパー姿のキムジョンイル総書記が、7~8名の随員と何の話か晴れやかな声で話していたが、こちらをふり向いた。

キムジョンイル総書記と視線が合った瞬間、ヨンジンは火のなかに入ったように、顔や全身が熱くなり、息が止まった。

どぎまぎして立ち止まった。胸がどきどきした。彼は兵士のときの声色で力強く報告した。

「キムジョンイル総書記、郡党責任書記、チャヨンジンです！」

キムジョンイル総書記は、それがおかしかったのか、明るく笑い手招きした。

「ここに……。近くに來なさい」

人情深いまなざしと暖かい微笑みに、すこし前の不安感や緊張が消え失せて、落ち着いて近づいていった。

キムジョンイル総書記も明るく笑いながら歩いて来て、気兼ねなく手を握ってくれた。

「ここの主人も知らず郡内に入り、すみません」

ヨンジンは、気さくなその姿に感動し、真心をこめて申し上げた。

「キムジョンイル総書記、お入りください。キムジョンイル総書記をこの地にお呼びしたいというのは、郡内の全党員と人民の願いです！」

「感謝します。きょうは日程が急で……。党員と人民に会うことができず、申し訳ないと、わたしのあいさつを伝えてください……」

いつ来たのか、キムジョンイル総書記の後ろに立っている道党責任書記が残念そうな表情を浮かべた。

「仕事が忙しくないですか？ いつから責任書記として仕事をしていますか？」

道党責任書記が彼の経歴について話し、この土地の生まれであり、除隊軍人出身で、キムイルソン総合大学を卒業したと申し上げた。

「ああ、そうですか。郡の農業の作柄はどうですか？」

「春遅くと、初夏に干ばつにみまわれましたが、灌水体系が功を奏して、作柄は良好で

す」

「そうですか。主席は都市や平野地帯よりも山間地帯の人民の生活をもっと心配されますが、作柄がよいとは嬉しいことです。何だかんだと言っても、農業がよくできなくてはなりません」

「このトンムが郡党責任書記になってから、仕事を少なからず進めました。郡を現代的に整えるために建設現場も大きく展開して……」と、パクユンシクが申し上げた。

「良いことです！」

そのような評価を受けて、ヨンジンの顔に当惑の色が浮かんだ。

「前の責任書記のトンムがここで長い間活動しながら仕事をたくさんおこない、郡所在地も農村テーゼで明らかにされた思想、技術、文化革命の拠点らしく基本的に整えました。人民の要求がだんだん高まり、郡所在地を現代化し、里所在地もむらなく整えようとしてきましたが…… 思い通りにはなりません」

「現代的にむらなく整える！ そうしなくてはなりません。平壤でも 60 年代、70 年代に建てた住宅はすでに古くなりました。時代が発展し世代交代が進むほど、人民はよりよい家、もっと文化的な環境で暮らすことを望みます。自主的で誇らしい生活をこころゆくまで享受しようという民衆の志向を実現するのが、わが党の使命ではありませんか」

どうしたことが、キムジョンイル総書記の気づかわしげなまなざしが、ヨンジンの顔から手にすべりおりてきて止まった。彼は思わず、手を後ろにそっと隠した。

「真っ黒に日焼けして……」

キムジョンイル総書記はとても満足したように、ヨンジンの手首を温かく握り、随員をふりかえった。

「このトンムの顔を見なさい。どのように働いたかを推測させます。民衆と渾然一体となっている。わが党活動家の顔はこのように勤労大衆の顔と同じでなくてはなりません…… すべてにおいて郡党責任書記の手本です」

そうして、穏やかに言った。

「大道路や鉄道からも遠く離れたこのようなひっそりとした山里で仕事をしようとするれば、隘路や難関が一つや二つではないでしょう。主席は以前に、咸北道を現地指導しながら、山間地帯の人民生活を平野地帯にも劣らないように向上させなくてはならないと懇切に教えられました。なにが一番の隘路ですか？ 何でも提起してください」

「……」

喉が詰まった。解決してほしいと提起したい問題は一つや二つではなかった。百も千も…… 輸送手段、トラクター、農薬、鉄鋼材、板ガラス、放送車、楽器…… すべての要求が一度にどっと出て、火の玉となって喉を焦がすようだった。そのため、言葉が出なかった。

「何でも提起しなさい！」

随員が焦った顔で腕時計を見た。出発する時間が来たようだった。ヨンジンは視線を落とした。国の経済生活になんの寄与もせず、負担だけ掛けるのかと思われ、喉を熱くする火の玉のようなものをかろうじて飲み込んだ。

「キムジョンイル総書記、心配いりません。不足しているものがないわけではありませんが、自力で解決することができます」

するとキムジョンイル総書記は、彼の腕を気さくに叩いて、うなずいた。キムジョンイル総書記はパクユンシク責任書記に、道党でよく助けるようにと言い、ヨンジンの手をあたたく握った。

「郡を立派にととのえなさい。一度かならず訪ねてきましょう！」

車が出発した。あまりにも短い会見であわただしい出発だったので、わけもわからず、彼は道端に呆然と立っていたが、車の後を追って夢中で走っていった。耳のそばで台風が吠え猛たけているようだった。どういうわけか、脚を殴り飛ばしたような激しい打撃に、彼は呻き声をこらえて道端に歩いていき街路樹にすぎた。キムジョンイル総書記が再び訪ねてくると最後に言ったことばが、頭の中で鳴り響いて、長く余韻を残した。

最初の1年間は、もしかしたらとキムジョンイル総書記を待った。

しかし、時がたつにつれて、自分の期待がどんなに無邪気なものかおのずと悟るようになった。党総会、最高人民会議、北方の大黒色冶金基地と世界屈指の鉄鉱山、順川ピナロン工場建設場をはじめ、社会主義大建設場にたいする現地指導、祖国の運命を脅かすアメリカ帝国主義の「チーム・スピリット」合同軍事演習、軍事分界線でのひんぱんな挑発事件、史上類例のない第13回世界青年学生祭典……世界の世論をゆりうごかすこのような出来事についての報道を聞くたびに、キムジョンイル総書記の指導と不眠不休の労苦について胸痛く感じ、自分の願いがどれほどがんぜないものであるか悟るようになったのである。

しまいには、彼は幸運の日を期待しなくなっていたが、魅惑された魂の未練というものは消すことのできない炎のように、明け方に電話の音が鳴っても飛び起きることがときおりあった。そのようなことがあった後によくありがちな失望が彼にはなかった。彼は国の領土の200分の1で力強くくりひろげられる革命と建設を政治的に導く郡党責任書記だった。

テレビの映像や記録映画でキムジョンイル総書記を見ても、その日が懐かしくよみがえり、人よりもっと喜び、指示の伝達をうけても、言葉の端々から霊将の気概と肉親の情が感じられ、胸が熱くなった。キムジョンイル総書記が来られなくても、いつも近くにおられるような幸福感のなかで働き、暮らすことができた……。

空き地のまわりに哨兵のように立っている青々としたチョウセンマツも、絨毯のように敷きつめられた芝生も、沈黙のなかでその日を追憶しているようだった。

チャヨンジンはうつむいて、空き地のまわりをゆっくりと歩いてまわった。一まわり… … また一まわり… … 道党責任書記から伝達された、キムジョンイル総書記の指示、われわれは社会主義建設の成果によって「改革」に冒された人々に、われわれ式の世界主義建設路線の正当性と生活力を示さなくてはならないという教えは、チャヨンジンに大きな衝撃を与えた。

党活動家になるずっと前の時期から、彼にとって主席の指示通りにやれば社会主義をりっぱに建設することができるというのが生活の真理、確固たる信念になっていた。一度もその真理に疑惑が生じたり、信念が揺らぐことはなかった。

それゆえ、ソ連と東欧に「改革」の風が吹き、領袖と党の業績を崩し、社会主義を中傷しているというニュースを聞いたときから、「改革」を考えるとほとんど本能的な警戒心で神経が鋭敏になって来ていた。

それで、人民経済大学でも招聘講師の講義を聴いたとき、あいまいな問題点を発見し、立ち上がって質問をしたのだ。

さわやかな風が吹いてきた。ヨンジンは物思いから覚めた。そして小道にそって大通りの方に歩きながら、この山間僻地の郡でも、わが社会主義の生活力が現れるように奮発し、奮発して、さらに奮発しなくてはならないと、心に刻んだ。

ふと、道党責任書記が台所と倉庫の広さについてたずねたとき、返答できなかったことが思い出された。

(わたしが、人民のために服務するというのも、具体性のない虚言ではなかったのか……)

通常なら、大したことではないと見なせる台所や物置の広さ、そこに込められているキムジョンイル総書記の深い意図が思われて、心が重くなった。

2

道端にとめてあった自転車のそばで、郡行政経済委員会のクヨンセ副委員長がうろうろしていた。彼はつるりとはげあがった額を光らせてあちこち見まわしていた。自転車の持ち主がどこに行ったのかわからず探しているようだった。

林の中のしいんとした小道にそって大通りの方に歩いていたチャヨンジンは彼を見つけると咳ばらいをした。

クヨンセはふりむいた。彼は驚いたように責任書記を見つめた。

「道党責任書記同志だったでしょう」

「帰ったよ」

「え？」

「……」

「何かあったのですか？」

「郡党に戻ろう」

ヨンジンは自転車をおして歩き始めた。クヨンセはちょっとたじろぎ何も言わずについてきたが、彼の手から自転車を取りあげて自分で押した。

二人は無言で歩いた。

クヨンセは道端に短くのびた責任書記の影を踏まないように、こころもち後ろから歩いてきた。

ヨンジンはなにかぎこちない気分を感じて、ちらりと振り返ると、クヨンセは足早に歩いてきて並び、道党責任書記がなぜ来たのかを知りたくてあれこれたずねた。

ヨンジンはこんな道端でなく郡党に行って活動家たちをみな集めて伝えたかったが、とても気になっていたので仕方なく話しはじめた。

「郡党に行って具体的に伝えるけれど……キムジョンイル総書記がわが郡についてたずねられたというのです。どのように仕事をしているかと……」

「え、本当ですか!？」

「道党責任書記が党中央委員会に行って直接お言葉を聞き、その足で伝えにきてくれたのだよ」

「ああ、そうですか!」

「郡党にいては伝えなくてはならない」

クヨンセは顔を紅潮させてぶつぶつぶやいた。

「これは夢ではないでしょうか？　そうでしょうか？　こんな山奥の郡にまで関心を払われるとは……情勢も複雑なのに……道党責任書記同志が突然来られたと聞いて何だろうと思っていました」

「副委員長同志、郡をりっぱに建設しなくてはなりません。よく整備しなければ」

「はい……　本当に呵責を感じる人が多いです……」

クヨンセは話し続けたが、彼の声はしだいに小さくなった。これまでの事がちらちらと浮かんだからだった。

チャヨンジンが郡党責任書記として仕事を始めたときから今日にいたるまでに、主席がこの地方を三度ほど訪ねられたことは、いついかなるときも頭から離れることがなかった。

戦後のある年には、風雨に朽ちた木の橋が洪水で流されてしまい、靴を脱いで川を渡り、郡所在地まで訪ねられたこともあった。

郡党責任書記はその水辺にしばしばやって来ては、そこから離れられずにしばらく立っていた。山奥の川の底は、水垢がついた岩や石でごつごつしていた。

洪水で流されてきたものようだった。太陽に照らされてきらきら輝く水の流れに主席の姿が浮かび、水辺の砂にもその日の足跡がきざまれているように思えたからだった。

ヨンジンはよく考えた。行かなくてはならない所がたくさんあるのに、どうして人里離れた山間僻地の、鉱山もりっぱな林野もない、国家に何の寄与もできない、やせた山奥の地まで何度も訪ねて来られるのだろうか？　……人民が生活しているからだ、純粹に山間地域の人民の暮らしを心配してたびたび訪ねて来られるのだろうか。このように考えれば考えるほど、郡のすべてのものが気にかかった。住宅、地方産業工場、学校、病院、道路、サービス施設網……　あらゆるものが主席が願う水準からは、はるかにたちおくれて見えた。

ソントン郡所在地は1964年、『わが国の社会主義農村問題にかんするテーゼ』が発表され、思想、技術、文化革命の拠点としての郡の役割を高めるための課題が全面的に提起された後、小都市の面貌をもつように、道内でまっ先にりっぱに整えられたと道の日報に大きく紹介されたこともあった。70年代と80年代初めにも新しい建造物や施設が建設されたが、村や市街の全般的な面貌は時代の水準にいたっていないように思えた。里も平野地帯の農村にくらべてたちおくれていた。

彼は隣の郡党で書記として活動したとき、ときおりここを訪ねてきたが、そのときはすべてのものをなにげなく見ていたが、いったんこの郡の責任書記になるや変わった。見るものすべてに肯定と否定の評価をくだすようになり、すくなからぬ問題に自分なりの意見をもつようになった。いつのことだったか、隣の郡党の年配の活動家が言った言葉が思い浮かんだ。彼は党活動家の責任感と感受性は正比例すると言い、責任書記はその党的な責任感のゆえに、他の人が見えないことも先に見て敏感に感じると言った。

ソングユテ責任書記もそうしたことを感じていたのか、サービス施設も新たに整備したり体育館建設まで始めたようだった。しかし、引き継いだ体育館というのがどうも気に入らず、つくった建物を壊して基礎をさらに広く築いて再び建設しはじめた。隣の郡党にいたとき、ヨンジンは山をうまく利用して毎年農業生産を高めている彼を心のなかでひそかに尊敬していた。彼は人民の食糧問題を解決するために農業を発展させることに専念し、

郡を整備することについては手を抜いたのだろうか…… そうでなければ自分が整備しようとしたものにたいする過度の愛着心から、月日の流れのなかで時代遅れになったことがわからなくなったのだろうか？

日頃から、ヨンジンは前任者の活動を否定的にみる後任者にたいし情けなく思っていた。ソンギョテについて言えば、かつて活動と生活を少なからず助けられた先輩同志だった。20余年前、隣の郡党の組織部で指導員として活動しながら、彼から党の内部活動を教えてもらい、個人生活でも少なからず助けてもらった。

郡党活動を引き継ぐとき、ソンギョテはヨンジンが自分の後任者として来ることをたいへん喜び、追憶に浸り、かつての嬉しかったこと、困難だったこともいくつか話してくれた。熱い感慨に胸が高鳴った。

ヨンジンはソンギョテとのこうした関係から、彼がおこなってきたことを貴重に思い、不足点にたいしても善意に考えようと気づかった。

郡を新たに整える問題も彼と個人的に議論したかった。

ある日、ヨンジンは道に行った機会にソンギョテの部屋を訪ね、自分の意向をほのめかしてみた。ソンギョテはいいことだと喜びながら、たとえ自分は道にきたとしてもソントンを忘れることができるものかと言った。その言葉に力づけられた。

チャヨンジンは郡をさらに整備するために当該部門の活動家との協議会を何度ももった。行政経済委員会副委員長のクヨンセまでも、道からセメントや鉄鋼材を保障してもらわなければ家一軒建てることができない、前の責任書記も構想はあったが資材が保障できず、仕事を大胆に展開できなかつたと言った。他の人と比べるその意見にヨンジンは腹がたつた。

「誰かができなかつたからといって、みんなができないならば人民の生活は改善されるかね？ わが郡は道のなかでも、もっとも山間奥地に位置している。鉄道もなく大道路が通っているわけでもない。分界沿線の郡でもない。そうした郡にいうまでもなくまず関心を払わなくてはならないが、われわれにまで資材を保障する余裕があるだろうか。われわれは自分たちの手で、知恵を集め力を合わせて自力更生しセメント、鉄鋼材、ガラス、タイルなど…… みな自分の力で解決しなくてはならないのだ！」

クヨンセは目を大きく見開きじっと彼をみつめた。ヨンジンは鋭い目で彼を見返した。

「資材がないのに行政経済委員長、経営委員長…… 幹部たちの家はどのようにりっぱにつくったのかね？ 瓦が壊れたり雨もりがする一間の家で暮らす世帯もあるのに……。人民のことをまず先に考えて、幹部の家を整備したような熱意を百倍もだせば資材も解決できるだろう。副委員長トナムは党员ではないか。わが党の綱領には勤労人民大衆の福利増進を党活動の基本にすることが明示されている。諸君、考えてみたまえ。わが郡では出生率は高まっているのに人口は増えなかつた。わが住民のなかには去ってしまった人たちを非難するかわりに、うらやましがる人たちまでいる、知恵がはたらくとか活動力があるといつて…… 他のことはみなおいて、活動家としての自尊心がくじかれぬのか…… 20年、30年前にこの郡を築いて生きてきた人々は、年をとって生活舞台から退き始め、そのかわり新しい世代が登場してきた。彼らはみな高等中学校以上の知識をもって文化的要求も高い青年たちだ。この公民たちに、郡のこのような面貌が気に入るだろうか！……」

彼は自力更生の革命精神で郡を整えるためには何よりもまず、ことごとく山を崩してで

も石灰石埋蔵地を探してセメント工場をつくり、レンガ工場、瓦工場、タイル工場をはじめとした建材生産基地を整えようとよびかけた。その日の夕方、すでに協議会についての噂が郡所在地に広まった。家々では興奮して夜遅くまで話の花がさいた。郡党委員会は党組織を動かして石灰石埋蔵地を探查するうえで党員が先頭にたって役割を果たすように導いた。1か月たっても2か月たっても石灰石はみつからなかった。チャヨンジン自身、山の斜面や谷間など、くまなく見てまわったがみつからず、みなさじを投げてしまった。

ある日曜日の午後だった。のどかな天候だったが、突然、雨雲がおしよせ雷が鳴りにわか雨がふりしきった。ヨンジンは事務室にいた。だしぬけに窓から青い閃光がひかり、近くで雷が落ちる音がした。それから激しい雨……、にわか雨はすぐに止み、ふたたび陽がでた。外から、子供たちが喜び騒ぐ声が聞こえてきた。

夕暮れどき、チャヨンジンが気になることがあって谷間の方にのぼっていくと上の方からだれか人が魂を奪われたような表情でかけおりてきた。足が地につかず飛んでいるかのようだった。

驚いて立ち止まった。その人は両手に握った石の破片を見せて石灰石だと叫んでいた。そして息をつめ味を見て、ほろ苦いと言った。彼の口元に石の粉がついているのが見えた。

ヨンジンは彼の手から石のかけらを奪いとってあついまなざしで見つめ、それを口にもっていった。ほろ苦いその味は蜂蜜のように甘かった。その人を抱きしめ万歳を叫んで大地にひっくりかえった。彼は責任書記の背中をたたいて、自分が探したと言わないでくれと言った。

「それはどうして？ 郡ではみんなに放送で伝えるよ！」

「自分が……このチュサンミンが探したということを知れば、これが石灰石だと誰も信じないでしょう」

「なんだって？」

「責任書記同志は来たばかりだから何も知らないでしょう。わたしは……反逆者の息子です……」そして彼は、立ち上がるとすすごと降りていった。

クヨンセに聞いてみると、チュサンミンは消すことのできない政治的汚点をもった人だが、農村建設隊で左官をしているといった。彼は道所在地の近くにあるセメント工場現場技師として仕事をしていたが、数年前に郡に来た人だった。彼の父は思想的傾向が悪い商売人だったが、祖国解放戦争の戦略的な一時的後退の時期に蛮行をはたらいて、妻と子供を見捨て愛人だけを連れて南に逃亡した。チュサンミンは工場大学を卒業して現場技師として配置されてから、創意工夫をしたという評判だったが、火災をおこして資材倉庫一つを焼失してしまった。事故調査で父の陰が見え、意図的な害毒行為とみなされたが、友人の証言により寛大な処分で免職になった。郡に来て食糧工場の電気工として仕事をしていたが、そこでまた減速器を改造するといって仕事をしていたところ、電気事故をおこして機械室をことごとく燃やしそうになった。前回の事故と重ねあわせて嚴重に審議されたが、ついに不注意による事故とされた。この事実を知った前の責任書記は前科もある人に技術創案をまかせたと手厳しく追及した。彼は農村建設隊に移された。

次の日、チャヨンジンはクヨンセといっしょにチュサンミンを先立たせて、石灰石を発見したという谷間の上の方にのぼっていった。彼はこのことでまた、何か災難にあうのではないかと緊張した面持ちで、自分のことだけ信じないで探查隊から人々を呼んで鑑定し

てみるのがよいと言った。

石灰石は質がよく、埋蔵量も多かった。石灰石鉱山を開発する一方、小型セメント工場の建設を始めた。チュサンミンに設計と施工が託された。彼はこれまでにない信頼に衝撃を受けて寝食を忘れて仕事をした。小型ではあったが、必要なものはみななくてはならない一つのセメント生産工場の体系を、何も無いところからつくるのはたやすいことではなかった。ほぼ半年にわたる悪戦苦闘のすえ、ついにセメント工場が完工した。ところが、支配人として任命できるだけの人材がいなかった。郡でセメント生産について知っているのはチュサンミンしかいなかった。

クヨンセをはじめ何人かの活動家たちは、誰も人がいないからといっても、彼を支配人として任命する問題は一つの経済単位を任せることであるだけに、慎重でなければならないと言った。それで、そのまま責任者として続けさせた。セメントが生産されはじめると、瓦工場をつくり、レンガ工場、資材工場をつぎつぎにつくった。一方では設計室をつくり、郡所在地の模型図案と道路、住宅、病院、学校、文化会館をはじめとする部門設計も作成して大衆討議にかけた。

建設は道路を拡張し舗装する工事から始めた。道路を合理的に区切って区間ごとに機関、企業所、住民を配置して競争させるようにした。すべての郡所在地が建設現場と化してわきかえった。ヨンジンも人民といっしょになって水桶をかついでかけまわり、汗を流してモルタルを混ぜる作業もした。その過程で多くの人と親しくなり心を開いて話もし、郡の生活ぶりについての率直な意見も聞いた。休みのとき娯楽会が開かれると、人々の要請と拍手喝采にまけて歌まで歌った。一人の女性が目にとまった。40 前の美しい女性だった。食糧工場支配人のその女性は、休憩になるときまって冷茶や甘い水の桶をもってあらわれ、みんなに一杯ずつすすめ、冗談口にもしっかりと応じた。

ある日の休憩のとき、チャヨンジンが歌を歌い終わると、両手で冷茶がはいったコップをさしだし優しく微笑んだ。

ある日の夕方のことだった。チャヨンジンが道路工事場から郡党に帰るときに、その女性がついてきて話しかけた。製紙工場で電気工として働いているところがうまくいわずに道所在地の化学工場に移ることになっているが、移してくれないということだった。

前任の責任書記にもお願いしていた問題だったが、助けてほしいと頼まれた。

そうした問題は引き継いだこともなかったし、電気工という青年については初めて聞くことだった。たぶん赴任直後、当該機関に適切な理由がなく、むやみに住民を移動してはならないとやりこめられたために、おさまりがつかなくなったようだった。この女性の涙まじりの懇願を退けるのは難しかった。

彼は調べてみるとあいまいな返事をした。

道路工事を終えたあと古い住宅を壊して、そこに多層住宅をつくる仕事が始まった。大通りに面した平屋建て住宅は、大道路にそって長くはりめぐらした塀のために屋根だけ見えるが、クヨンセはどういうわけかその塀はこわさないで、平屋建ての家だけ壊しはじめ、作業はじつに不便となった。

ある日、ヨンジンが建設現場を回って、クヨンセに塀から壊さなくてはならないのに、車も通らないだろうと言った。クヨンセは堪え難そうな顔つきで大きく息をついた。

「壊せというのなら壊しましょう。気軽に手を出すことができませんでした。以前、ソン

ギョテ責任書記が発起してつくったものです。白い石灰質をつかって色感がよく花や紅葉の模様までほどこされ、どれほど満足していたかしれません。平屋建ての村やがらくた、汚いものをみな遮っているのです、どんなにか美しいことでしょう。通りは明るくなったし。……その年の衛生文化月間にはこの通りは道の日報に写真まで掲載されました。ソン副委員長にことわってから壊すのがよくないでしょうか？」

「ほう、君も？　すごいセンチメンタリストだな。これを壊すからといって腹を立てるのかね？　ハハハ……」

すると一人の労働者が鍬をかついできて古い遺物をなくしてしまおうと声をあげ、塀の壁を激しくたたきつけた。そのあとに続いて青年たちがどかどかと走って来て、鍬や大槌で壁をこわしはじめたが、誰がもってきたのかブルドーザーまで現れて、塀は簡単にがらがらと崩れた。音をたてて崩れた破片の下からは、さまざまな昆虫が這い出し、ネズミが四方八方に逃げ出し、コウモリまで飛び出した。労働青年が、あまりにも奇妙で仕事の手も止めて騒ぎ、それを見ていたが、一人の仲間は「ひやーっ、この下にこんなやつらが隠れていたのか？」と声をあげた。どういうわけかクヨンセは沈ちん鬱うつな表情で横にたっていたが、そのように声をあげた青年を不快そうなまなざしで見た。

初めは試験的に多層住宅を一棟建設し、その経験を土台にして一棟、また一棟と建てていった。住宅建設現場がしだいに広がり大規模に建設されるようになると、セメントや鋼材の不足を時々刻々と感じるようになった。

セメントは郡内で生産したものに多少の補充を受ければよかったが、鋼材はすべて製鉄所に依存しなくてはならなかった。製鉄所は全国の社会主義建設場にも鉄鋼材を円滑に保障できない状況で、山間の郡まで保障する余裕がなかった。鉄鋼材がなくて建設が中断されることがしばしばあった。

チャヨンジンは郡内の全党組織を動員して、鉄屑収集運動を大々的にくりひろげ、製鉄所の鋼鉄生産を何度も助けた。それだけではなく住宅建設用材木や農産物も送って、製鉄所の労働者を支援した。これに感動した製鉄所の労働者は、お返しに鉄を増産して何度も送ってきた。ヨンジンは製鉄所を訪ねて激励し、無口で無愛想なりグンウ支配人に感謝のあいさつをした。

リグンウ支配人は自分にではなく労働者にお礼をいうようにとあって、郡の建設をすこし減らしてほしい、これからは助けることができないと伝えてほしいと言った。彼は見栄をはらない人だった。

こうして、ソンギョテ副委員長に電話で、また直接訪ねてお願いした。彼は製鉄所に話して二～三回鉄鋼材の供給を解決すると、自分の前職や人間関係でソントン郡にあまりにも気をつかうといわれたとあって笑った。

道路を新しく整備し多層住宅を建設する指導幹部と人々は自己の力を信じるようになり、建設場を徐々に大きくして、学校、病院、地方産業工場を新たに建設したり改築し、体育館建設も再び始めた。

チャヨンジンは農業発展に力をいれながらも精力的に建設をおし進めた。キムジョンイル総書記が山間郡の地味な部屋で、郡の位置と役割にたいして展開した思想とその理想的な面貌や構想を思うと眠れなかった。総書記が自分の手を熱く握って、郡を立派に整えなさい、きっと訪ねてくると激励してくれたことを思い起こすと、胸が熱くな

った。

彼は責任書記として党組織を力強く動員して建設をおし進めただけでなく、建設の労力となって水桶をかつぎ、人々の先頭にたって走りまわり、セメント、砂、砂利を運んだり泥をつかんで労働者にとけこんで左官の作業もした。レンガをあやまって重ねたり壁をガラスのようになめらかに塗っていないところを発見すると、こわして作り直すように要求した。

建設場で夜を明かすことも一度や二度ではなかった。目は充血し唇は干上がっていた。それでも疲れを知らなかった。わきあがる労働意欲のために、一日中建設場で仕事をして、部屋に帰ってからは建設技術図書を読みあさった。資材が保障できず心が乱れるときは、たてつづけにタバコを吸い気持ちを落ち着けようと苦勞した。

チャヨンジンはキムジョンイル総書記の関心が郡に向けられている今日、これまでのことを振り返ると自分の活動と生活に空白が多く、やりとげたことも大したこともないようで、とても心苦しかった。

3

チャヨンジンは郡党にきて郡党活動家と郡級の責任幹部を招集し、キムジョンイル総書記の言葉を伝達したあと、クヨンセを伴って住宅建設場に出かけた。二人はまず農場員世帯が入る三階建ての住宅からたずねた。住宅は築造が基本的に終わり、内装作業の真っ最中だった。

玄関に入ると、各階の間取りごとに仕事をする人々が互いに呼びかける声や、歌声、口笛が喧しかった。廊下や階段の壁に貼られた建設戦闘速報は、労働安全を強調し、内装作業を稲妻のように速くしながら質を高めようと呼びかけていた。ある戦闘速報には、チョミョンソクという乙女の左官技術が手早くこまやかで、1日の計画を180パーセントやりぬいたということが力強い筆致で書かれていた。

萩で編んだ安全帽を横っちょにかぶったごつい青年と、赤いハンカチで髪を軽く束ねた可愛い乙女が階段を駆け降りて来ると、責任書記に頭を下げてあいさつした。青年は顔見知りだったが、乙女ははじめて見る顔だった。

ヨンジンは戦闘速報を指さして、たずねた。

「1日に180パーセントとはすごいじゃないか。質が保障できるのかね？ 問題は質だよ」

「左官の腕がどれほど確かなことか！ 板ガラスのようです」と青年はにこにこした。

「確かだと？...」

「検閲してください」

「チョミョンスクというのは誰だね？」

「このトナムですよ」

「ああ、そうか？」

乙女はゆすらうめのように顔を赤らめ、首を外側にそむけた。

「自分が住む家だから、腕が確かでないわけがないではありませんか。村の農場の農産旗

手としっかり百年の契りを結んだのですよ。管理委員長が、この家がみなできたら、二間のところを与えようと言ったのですよ」

「おお、そうか！」

乙女は、もうたえきれずに、片手で青年をドンと突き、外に飛び出した。そのはずみに、青年は肩が壁にあたり「あいた！」とおどけて顔をしかめた。

「君、そんなに恥をかかせて良いのか？」

すると、逆に青年の方が目をむいた。

「ちえっ、知らないんだな。からかうともっと喜ぶのに。ハハ……」

チャヨンジンはその声に高らかに笑った。クヨンセもにっこり笑って、乙女が立ち去った屋外をながめた。

「責任書記同志、これは本当に秘密ですが……内部からカボチャの種を剥くような話があるでしょうか……」

彼は興味を引かれ、腰を屈めて青年の顔をふりかえった。

「それで？…」

「あの乙女はおとなしそうですが、妙です。数日前の夕方でしたが……あの二階の二間のところで仕事をしたのですが、ライターを落としたので探そうとして来てみると、そう、あの乙女が一人残って部屋を掃いているではありませんか。そっとながめてみると、床の土砂を掃き集めて誰に言っているのかぼそぼそと独りごとをいっていたかと思うと、静かに歌を歌いはじめたのですが、いやー、あんなに蜜のように甘い歌声ははじめて聴きました。新婚生活を思い描いているのか、どれほど深く浸っているのか、咳払いをしてみても気がつきませんでした。わっと声をたてようかと思いましたが、引き返しました」

「何の歌だったかね？」

「空は青く、心楽し……この歌ですが、ヒャー、責任書記同志、その二間をその乙女の夫婦に与えるというのはどうですか？」

「トムムが管理委員長に提起して見たらどうかね？」

「わたしがですか？」 青年は目を丸くした。

「わたしには住宅を配分する権限はないではないか」

「そう言わないでください。責任書記同志こそ、郡人民委員会委員長を兼ねているではありませんか？」

「君にはかなわないな。ハハ……」

チャヨンジンは、彼の肩を叩いて、上ってみようと言った。青年は口を開けて笑い、後に従った。二階に上がった彼らは、青年の後について乙女が空想にひたり砂を掃き集めていたという部屋に入り、見まわした。その部屋は内装を完全に終えていたが、どれほど真心をこめて内装をおこなったのか、天井や壁は土色が均等で滑らかだった。窓の中に差し込む陽の光が斜めにさす壁面は、見えるか見えないかの湯気で曇っているが、壁に込められた人々の息遣いが蘇ったものようだった。

ヨンジンは胸がつかえて、まだ柔らかい壁を擦ってみて、台所と物置を見まわった。そこも非のうちどころなく内装がほどこされていた。彼は物置の中に入り、目算で幅と長さを測って、青年にたずねた。

「トムムが見たところではどうだね。この物置は狭くないかね？ この家には農場員世帯

が入るのだが……」

青年は手の甲で軽く叩いて安全帽を上げ、物置の中を見まわした。

「これが狭いですか？ いや、あの古いアパートの物置に比べると上出来ですよ」

「以前のものと比較しなくてもよい。より暮らしやすく新しく整えようということなのだから」

横の部屋で働いていた5～6名の青年たちがどやどやと集まってきて、しきりに物置の中を覗きこんだ。

チャヨンジンは彼らにもたずねた。

「トムムたちが見たところではどうだね。この物置が農場員世帯の物置として狭くないかな？」

彼らのなかから、黄色のビニール安全帽をかぶった体つきのがっしりした青年がひとこと言った。

「すこし狭いです」

すると、ごつい青年が負けん気でもおこったように、手振りまでまじえて声をはりあげた。

「狭くないです。この幅と長さを見てください。物置なんか広くしてどうするのですか」

「君、何がわかって言っているんだ？」と、ビニール安全帽が面と向かって論駁し始めた。

「農場員には物置に保管するものが多いということだよ。犁すき、かます、瓶、電気工具箱、のこぎり、鎌……縄の筒……。あの古い家では物置が狭くて、みな外に小さな商店のような物置をそれぞれ建てたではないか。それが見た目に良かったというのか？」

「チェッ、遅れた意見だ……。この現代的な家にまでつまらないがらくたを入れておこうというのか。古い時代の遺物として清算してしまうべきじゃないか」

「なに、清算だって？ お前、キムチ瓶をなくしてどうやって暮らすんだ？」

その勢いに、爆笑が起こった。

「ハッハハー」

「ホーホーホ……」

責任書記もからからと笑った。ごつい青年は、恥をかいたように顔を赤くした。

「だれがキムチ瓶と言ったの……」

いつ来たのか、青年たちの後ろに立っていた中年の婦人が近づいてきた。

「責任書記同志、このトムムの言うことが正しいです。キムチ瓶もそうですが……分配を受けた穀物等を置いておく物置が広ければ広いほど、良いです」

チャヨンジンはその女性をふりかえって見て、穏やかに名前をたずねた。

「村の農場のペクポオクと申します」

「そうですか、ここで働いているのですか」

「いいえ。わたしたちが住む住宅を建ててくださるので、どんなものか見に来たのですよ。休憩時間にと、ちょっと差し入れを持ってきました」

「それはりっぱなことです。それで、何をお持ちになったのですか？」

「変わったものではありません。キュウリの冷し汁とか果物とか……」

その声に、青年たちはにっこりと笑いざわついた。

「奥さんの意見を参考にします。われわれと一緒にちょっと台所に行ってみましょう」

女性は、責任書記が自分に関心を示すと、ちょっと当惑したように、たじろいで立ち止まった。地味な顔立ちだった。白いチョゴリに黒のチマを着て、なにかの紐のようなもので腰をかたく縛ったその女性は、チャヨンジンが台所の間に入ると、憤ましくついて入った。他の青年たちも敷しき居いまでどやどやと押し寄せ、台所の中をながめた。ヨンジンは、台所の床やかまど、調理台、食器棚を置く位置などを見まわり、女性に静かにたずねた。

「奥さんの見立てではどうですか。台所が狭くありませんか。構造は気に入りますか？」

女性は真っ黒に日焼けした手で口を押さえた。

「わたしが何がわかるのでしょうか……」

「台所で食事の支度をする女性に分からなくて、だれが分かるでしょう。われわれ男性は、台所仕事の重い負担から女性を解放しようと言葉では言いますが、女性のご苦勞と困難さについてはよくわかっていません。わたし自身がそうです。ちょっと意見を聞かせてください。台所は本当に狭くありませんか？」

女性は気軽にこたえることができずためらっていたが、不慣れな目で台所の床を再度見まわして、しずかにため息をついた。

「心配ないでしょう……」

青年たちの中のだれかがさっきはきはきと言っていたのに、いや心配だと独りごとを言う声がした。まただれかは、女性を代表して発言するのだから、責任ある発言をしるとやりこめた。その声に、みなが軽く笑った。チャヨンジンは、青年たちの方をふりかえって、わざと重々しい表情を浮かべた。

「責任書記同志……」と、女性は口を開いた。

「台所にもこのようにベランダがついているとほんとうに良いです。何かを置いておくにもそうだし、日光で布巾を乾かすにもそうだし、ほんとうに……」

「ええ」と、ヨンジンがうなずいた。

「今の家の台所はこれより少し狭いですが、最初に入ったときは狭くありませんでした。ところが、一年がすぎ、二年がすぎ、分配を受けて大きい壺やらバケツやら花瓶やら所帯道具をしばしば買うので、狭くなりました…… バラの蔓つるもはって……」

「所帯道具が増えて…… 狭くなった、なんと良いことではありませんか！」

責任書記のこのような援護に、女性の目が生き生きと輝いた。

「良いことは良いのですが…… 狭くて気をやむときがありました。祝日や宴会のときには親戚が集まってきて、台所にも一人ではなく嫁ぎ先の姉妹、嫁など三人が立つようになるので……」

「ああ、そうですね。……」

「責任書記同志。わたしの考えでは、せっかくなら、少し……」

「広くした方が良いというのでしょうか？」

「はい。……4~50センチだけ広くしても……」

青年たちのだれかが、内装までみな済ませたのに、ここにきてそのような提起をするのかと、ぶっきらぼうに言った。すると、広げなくてはいけないとか、これくらいならいいなどと、それぞれ言いたてた。ヨンジンは、にっこりと笑ってそれらの意見を聞いていた

が、一発かました。

「それまでにしなさい。狭くないと言ったのはだれだね？ そんなトンムに嫁ぐという娘がいたら、わたしが必ず言ってやろう。言ってやるとも。このトンムは生活を知らない間ぬけだと！...」

ごつい顔をした青年が両手の拳で頭を叩き「あいた！」と、首をすくめた。そのとたんに爆笑が起こった。家のなかに活気が満ちた。ヨンジンはクヨンセをふりかえり、実務的な語調で台所の間ももっと広げようと言った。すると、女性の顔がパッと紅潮した。

「ありがとうございます！」

「これは、キムジョンイル総書記の意思です。道党責任書記が党中央委員会に出席して、農村建設にたいする指示を受けたのですが、キムジョンイル総書記は農場員の住宅をどのように建てるべきか、具体的に教えられ、物置と台所の問題も提起されました」

女性は呆然として責任書記を見つめたが、ぼうっとしてささやいた。

「まあ..... 党中央委員会で..... 台所問題がですって？...」

「奥さん、だから人民のための党だと言われるではありませんか。山村の住民も自分が暮らすところで社会主義制度の優越性を感じるようにしなくてはならないと言われて、家を一棟建てるにも人民の意見をよく聞いて、使い勝手がいいようにつくらなくてはならないと懇切に述べられました」

女性の目が潤んだ。責任書記とともに外に出るとき、家の中からは澄んだ歌声が響いてきた。

空は青く、心楽し.....

「副委員長、物置と台所をもっと広くしましょう」

「はい、討論します」

どういうわけか、彼の顔は明るくなかった。

4

深い緑の山並みに囲まれた山間の村は祝日気分でにぎわっていた。キムジョンイル総書記が述べたことばが初級党と分組級党、部門党と細胞を通じて全党員に伝達され、そのニュースが郡内に波のように広がった。いつも、世間から遠く離れた山間僻地で暮らすうら寂しさに慣れていた人々は、キムジョンイル総書記が自分たちの郡に関心をめぐらしたというその一つのニュースだけで、すでに世間との距離感をなくしてしまった。彼らはにわかにかに、国のわきかえる生活の中心に立ったように思い、党中央委員会を身近に感じ、はつらつとした顔をしていた。昼間は職場で、夜は家庭ごとに、キムジョンイル総書記が述べた言葉をそらんじ、自分たちの故郷の将来についてさまざまな構想をめぐらし、話に花を咲かせた。

郡放送委員会は、職位別、職業別に、人々の決議を編集して放送し、宣伝車は朝から夕方まで村の通りだけでなく里にまで出かけて行って、人民を新しい生活の創造へとふるい立たせた。宣伝車青年放送員のさえざえとした声が山里にこだました。

「片田舎のソントンの地に太陽がのぼった。新しい日が始まった。郡内のすべての勤労者

のみなさん、キムジョンイル総書記の指示を高く掲げて、わが郡を、われわれの手と知恵と力で、社会主義樂園に築きましょう！ 職場ごとに忠誠の玉の汗を流しましょう！」

子どもたちの歩みにも活気があふれた。人々は建設場ごとに熱い汗を流しながら、てきぱき働いた。セメント工場の煙突からは灰色の煙が勢いよくあがった。

チャヨンジンは村の通りから離れた野山の麓のセメント工場を訪ねていった。建設の質と速度はセメント生産と直接関連しているため、つねに心をおけないのだった。彼にとってセメント工場を何日かに一度見まわるのは、一つの仕事のようにになっていた。

工場の入り口に入ると、破碎機や塔式組成炉の送風機が勢いよく回る音に胸が踊った。労働者たちはついさっき入ってきた貨物自動車とトラクターから石灰石を下ろしていた。ヨンジンが彼らに近づくと、トラクターの積載函の上から石灰石のほこりを薄くかぶった年頃のソソノ口作業班長が飛び下りた。彼は炉の作業班長であり、工場の細胞書記だった。作業班長は責任書記に近づき、帽子をとってあいさつした。

「トムムが炉のそばを離れていいのか？」

愛想のいい班長はにっこりと笑って見せた。

「人手不足で途方にくれているのに、炉の番だけしていただけますか。炉は何日か伝令が来なくてももうまくいきます」

「そうかね？」

「はい。責任書記同志、今、鉱山で質のよい石灰石がどんどん出てきます。掘り出すたびに積んできてこそ、仲間が熱意をもってたちあがるではありませんか。輸送が滞っています」

「わかった。運輸機材を増やそう」

ヨンジンは手帳を取り出して班長の意見を書き入れた。

「責任者はどうしていないのかね？」

「実験室にいます。セメントの質を高めるには、炭の燃焼率を決定的に高めなくてはなりません。無煙炭におがくずを混ぜてみようと考え、その実験にあたっています。数日間、家にも帰らず現場で夜を明かしました」

「細胞でよく助けなさい」

作業班長はなにか考えていたが、ことばを続けた。

「以前には... 自分は創意思案をすると事故をおこし、事故をおこすとひどい誤解を受けたといっておじけづいていた人が、郡党などで後押ししてやったので変わりました」

「そうか？」

「はい、完全に打ち込んでいます。... ところが... 責任書記同志、地方産業工場のなかで支配人という職制がないのはわれわれだけです。チュサンミン技師をただ責任者だといっていますが、ときには区別されるようです。仕事で支障があるわけではありませんが、決裁した文書などの運行においてなおざりに取り扱うときもあるようです」

ヨンジンは胸がつまり、気がふさいで煙草をくわえた。

「わかった。その問題はまた話そう。深く考慮すべき問題があるようだから...」

彼はそれ以上言わず、班長をつれて実験室の方に行った。実験室というのは、事務室のそばにある倉庫として使っていた小さなベニヤ板の建物だった。彼らが実験室の近くに行ったとき板戸が開いて、作業服姿のチュサンミンが、一つの木筒を抱いて出てきた。木筒

のなかに真っ黒い豆炭が入っていた。

彼は、責任書記を見るや、木筒をすばやく置いて腰を曲げてあいさつした。作業服の前裾や袖や手に、無煙炭の粉が黒くついていた。

「ごくろうさん！」

ヨンジンは彼の顔貌を見ておどろいた。チュサンミンは数日のあいだに頬がこけ、目は充血し、片方の口角には水泡さえできていた。

「試験用豆炭かね？」

「はい...」

「おがくずを混ぜてみるとどうだね？」

「まだよくわかりません。おがくずのなかではチョウセンカラマツのおがくずが少し良いようです。温度を若干高めます。偶然ではないのか... 再度実験してみればわかります」

そばに立っていた班長が、製材所にチョウセンカラマツのおがくずは山のように積んであると言った。

「まだわかりません。そのおがくずの化学的組成を見ても理論的には可能ですが、無煙炭と配合したらどんな効果をもたらすのか... 再度試験してみてこそ配合比率も定めることができます。まだ遠いです」

成果を誇張することを知らないその言葉から、チュサンミンの人となりを感じられた。

「あまり無理しないようにしなさい」

責任書記は愛情に満ちたまなざしで、彼の顔をみつめた。

「夕方には必ず家に帰りなさい。どこか悪いところはないかね？」

「ありません」

どこか自信のない返事だった。

「ところで、顔色がどうしてそんなに悪いのかね？」

「消化がちょっと良くなって..... 村の診療所に行って消化剤などもらってきました」

「健康に注意しなくてはならないよ」

彼は板戸をおしあけて実験室に入った。机の上の参考書籍や実験道具、部屋の隅に散らばっている無煙炭とおがくずに苦心した跡が歴然としていた。

帰るとき、チュサンミンのがっちりとした手を握り、成功を祈ると熱く述べた。チュサンミンは豆炭の入った木筒を抱いて組成炉の方に重い足を運んだ。石灰石を石灰石として認定してくれたことに感動し、悩みを克服して立ちあがった人.....。

彼は、支配人ではなく責任者としておしたたことさえ無上に喜び、徹夜して奮闘した。腰を少し曲げて歩いて行く彼のうしろ姿を見守るチャヨンジンは、憐憫の情に胸が痛み、しばらく立ちどまっていた。

その日、ヨンジンはいくつかの職場をさらに見まわり郡党に帰ってきたが、家具工場の垣根のそばで妻と会った。妻は村の診療所で働いていた。彼は平素、道で妻に会っても、多くの人の目をはばかり別段ことばをかけずに通り過ぎたが、その日だけは歩みを止めた。

心が優しく寛大な妻の顔が、どういうわけか曇っていた。しかし、彼女はにこやかに笑おうと努力しながら、言った。

「責任書記同志、どうして立ち止まったのですか？ まあ、人を見るのに...」

彼はいつになく無愛想な顔で言った。

「セメント工場のチュサンミントムが健康をそこねているだろう」

「診療所に来て、消化剤をもらっていきましたよ」

「そうか？」

「触診してみると胃腸が固い感じがするので、郡病院に送って検査をしてみなくてはならないわ」

「うむ...」

「長男からまた手紙が来たわ。たぶん、もうじき除隊してくるようよ。スンヒがとても喜んで郡党の親戚に話したら、郡の社労青かどこか、いちばん良い所に配置しようといったそうだけど、知っているでしょ」

「あの子はキアム里農場か、いちばん困難な部門に送らねばならない。党活動家の息子ではないか？」

「あなたはまた...」 妻は目を曇らせた。

「じつは、あなた、すみません。変なことが起こったのよ」

「? ...」

「さきほど、家具工場の一人の婦人が、わたしにこっそり耳打ちするじゃありませんか。クヨンセ副委員長の話で、わが家に置く筆笥をつくったと... 行ってみたら本当でした。怒らないでください。わたしが筆笥を新しいものにできなくて、こんなことが生じたのですよ.....」

チャヨンジンは氷のかけらが飛んできて胸に突き刺さったように感じた。全身が凍りついたようだった。彼は妻とどのように別れたかわからなかった。ドキドキする胸をおさえて、家具工場に入った。

ある作業場の窓のそばに、ラックを濃く塗って黒光りする筆笥がいかめしそうに置いてあった。筆笥の戸に横から近づく支配人の顔が見え隠れした。彼は憤然とした顔で老けた支配人の眼鏡をかけた顔を見つめた。

「筆笥がいいね」

「はい..... 何かちょっと.....」

支配人は何かを感じたのか、返事をためらった。

「材木もとても良いようだが、どこでできたものかね？」

「新しく建てる住宅に入れるはめこみの筆笥用に原木を 100 余立方メートル入手しましたが、余るようなので、ここでちょっと..... 試製品としてつくってみました」

「クヨンセ副委員長がつくらせたというのは、これではないのですか？」

支配人は急に活気を帯びて気後れがなくなった。

「ほおっ、責任書記同志。そうなら下部の人々が息をころして暮らせませんか。人間の生活だから、多少のことはわからないままでいいでしょう。こう見えても、わたしも昔は道党にいたことがあります。経理でソロバンをはじいていましたが...」 そしてタバコをとりだして口にくわえると、旧式のライターでカチッと火をつけた。彼ののらりくらりした厚かましさに胸がふるえたが、しばらく肩をおとして怒りを静め、引き返した。

彼は、無意識に郡党に向かった。道をゆく人々が驚いた目でふりかえるのも気づかなかった。向こうから来る仔牛ほどもある黒犬がクンクン鼻をならしてついてくるのを見て、

はじめて立ち止まった。

(クヨンセ... あの人物がわが家の箆笥が古いことを、どうして知ったのだろうか？

引っ越して来たときか？ いつかの正月に家に来て、酒を飲んだことがあったらどうか。そんな夜だったか。... そのいまいましい箆笥は下の部屋にあるのに、いつ見たのだろうか。... どれほど敏感な人間なのか。...)

腹立ちまぎれの考えがここまでつのがつとき、一つの疑惑、恐ろしい疑いが脳裏に閃いた。彼はつと立ち止まった。

空に黒い雲がわきおこった。通りに建っている住宅の壁が息をころして彼を見ているようだった。

三日前に訪ねた三階建て住宅の二階..... その台所に入って見た。台所は広くしていないだけでなく、壁にタイルまできれいにはめこまれていた。チャヨンジンは後ろめたさに胸が崩れ落ちそうで、かまどの前にかがみこんで両手で額をおおった。目前で赤い火花が散った。

(クヨンセ... クヨンセ... 彼はどういう人物なのだろうか？)

以前、ソングユテ書記は、郡の責任的な活動家について引き継ぐとき、クヨンセについていろいろと良い評価をした。謙遜で作風が良く、大衆性もある。.....

(彼は何をみて、そのように高く評価したのか。自分個人にたいする「忠実性」にまどわされて、そのように評価したのではないのか。... 道党責任書記同志はそのとき、人の問題は前の責任書記の見解を絶対視せず、仕事をさせてみながら自分の信念にそって評価するようにと言ったが... ソングユテ同志の言葉を過信して... それで目が曇ったのではないのか。...)

クヨンセとセメント工場のチュサンミン、二人の顔が交互に浮かんだ。

(人間の良心と忠実性は職位には関係ない。...)

苦勞して生きてきたチュサンミンと、信賴だけ受けて生きてきたクヨンセ、二人の人間の精神状態が対照的で、憤激をさらにそそった。

(わたしには機嫌とりをして... 人民にたいしては？... その機嫌とりの代価として何をしようというのか？ 人民生活にたいする無関心、適当な...無責任な仕事にたいする黙認..... このようなことを期待しているのではないのか。安易に仕事をしながら良い暮らしができる道をつくろうというばかげたまねではないのか？ ソングユテ同志は、こんな機嫌とりを受け入れていたのか。党性をさびつかせるこんなおべっかを.....)

かれは前任者についてまで疑惑がおよぶと、それ以上考えまいと骨を折った。

かすかに、遠くに誰かが立っているような気配がした。

顔をあげると、三日前に会った気性の激しそうな青年が敷居に立って、じっと見下ろしていた。

「どこか痛いのですか？」

チャヨンジンは喉に灰がつまっているかのように、かろうじて応答した。

「いや..... だれが..... このようにタイルを貼れと言ったのかね？」

「え？ クヨンセ副委員長が、ここはそのまま完成作業をするように言ったんですよ」

「本当か？」

「確かめてみてください。瓦工場の方に行っていますよ。...」

クヨンセは瓦工場にいなかった。瓦工場では鉄製日用品工場に行ったと言い、そこに確認すると来なかったと言った。彼はさらにいくつかのところをたずねてみて、自分の執務室に帰り、行政経済委員会初級党書記に電話してたずねた。初級党書記は、クヨンセ副委員長は道に行ったと教えてくれた。

外では、雷の音とともに土砂降りの雨が降ってきた。窓ガラスに降りつける雨粒が滝のように流れおち、外の風景がかすんでゆらめいた。

夕闇がせまり事務室に灯をつけると、クヨンセが訪ねてきた。彼は進められる安楽椅子には座らず、応接卓の横から木椅子をもってきて壁にくっつけてすわり、手ぬぐいで雨にぬれた髪や額を拭った。そして、たずねもしないことを言った。

「こんなに中身を広げて暮らせますか？」

彼は鬱憤をぶちまけた。

「わが体育館の鉄鋼材は1キロも保障できないということです。道建設幹部の見解がこうなのに、資材供給委員会が動きますか。型鋼がなくて体育館の屋根にのせるトラスを何でつくるのですか？」

この問題だけは体育館建設を中止するのか、あの強情な総局長を折れさせるか、何らかの決断を下さなくてはなりません。送付委員長が支援票をあててくれれば大丈夫なんだが…… 責任書記同志、ソングユテ同志を直接訪ねて行って、会ってみませんか？」

チャヨンジンは机のうえに肘をついたまま、うつむき加減に聞いていたが、だしぬけにたずねた。

「会わなかったのかね？」

「わたしがですか？ わたしのようなものに、会う必要がありますか？」

どういうわけか、彼のことはよく聞こえなかった。動悸がドキドキとこだまするようだった。何を感じたのか、クヨンセも唇をかんで焦点の定まらない目で彼をじろじろと見た。

ヨンジンは、どうして物置と台所を広くしないままで完成作業をさせたのか、低い声で問い質した。間壁をみな張って内装までおこなっているのに、どうやって広げるのかとたずねた。台所だけ広げようとしても間壁をとりのぞかなくてはならないが、そうすると層幕がおりないということだった。

「わたしも確かめて見た。層幕は前壁と後壁にかかっており、間壁を取り除いても大丈夫だよ。そして、間壁をレンガで積み上げたので崩して、簡単にやり直せる」

すると、クヨンセは視線を落として、やるせない溜め息をついた。

「正直に言うと、みなできた家をどうしようというのですか、新しく建てる家をそのままつくってはだめなのか、そう考えていました。…… わたしが技術的打算から間違っていました」

「技術的打算？ これは技術的な問題なのか？ トンムにとっては、物置と台所は… そのようにいい加減にやってもかまわない些さ細さいな問題のようだな？ 人民を豊かで文化的に暮らせるようにしようという思想的志向から、平壤市の五万世帯の住宅建設がでてくる！ そうじゃないか！」

「はい……」

「わが郡の人民にたいするトンムの思想観点のために生じた問題ではないかね。台所を広

くすれば妻が不便なく過ごせるだろう。わが郡の人民が、そのような台所を使って暮らしてはいけないのか？ トナムは人民をどう思っているのだね？ 自分のように暮らす資格がない群衆だと思っているのか？ ちょっと試してみなさい。キムジョンイル総書記が農村の住宅建設について具体的に教え、物置と台所まで関心をめぐらしたということを知ったとき、胸がつかえなかったか？ わが党にたいして考えさせられることがなかったのか？」

クヨンセは、額ににじんだ冷や汗を手の甲でぬぐい、身の置き場がない様子だった。

「心のある人間なら、技術的に難関があったとしても、何としてでもやってみよう、あれこれ苦心するだろう」

「責任書記同志、改めます」

「たやすく改められるようなものではない。人生観に関する問題だよ。トナムは人民のために服務することに誇りを感じるか？ 生の誇りを…… 心を開いて試してみなさい。われわれのなかには、勇敢ではあっても自分がりっぱな生活ができるようになればなるほど、人民の不便にたいしてだんだん鈍感になる人がいる。トナムもそのような部類に属する人ではないか？ 党では人民の忠僕になるようにと、行政経済委員会副委員長という重要な位置におしたてた。ところがどうだろうか？ 人民の不便には鈍感で、他のことには非常に敏感な俗物になってしまった。トナムは人民に奉仕する人間なのか、幾人かの個別的幹部に奉仕する人間なのか？ いったい、どこに喜びと誇りを感じるのか？」

クヨンセは何のことかわからず、げげんな顔で責任書記を見つめた。ヨンジンは憤りを押さえて、ふるえる声で言った。

「きょう、家具工場に行ってみようよ」

「え？…」

「それを見た」

「なんだ。何のことかと思ったらそのことですか。生活は生活ですよ」

「わたしは今まで見たことがない。個別的な人に献身的に仕える人が、下部の人民のために忠実に服務するのを見たことがない！」

「本当にそうですか。引っ越して来たとき、家具調度があまりに少なくて噂になりました。人の真情をうちこわさないでください！」

チャヨンジンは拳で机をたたいた。

「やめろ！ それをただちに商店に持っていくんだ！」

室内の空気がふるえた。クヨンセは大きく見開いた目で責任書記を見つめた。冷たい警戒の眼光だった。

(つづく)